

昔、大学生の時、南青山の西洋骨董店でアルバイトをした。社長はTV「なんでも鑑定団」の鑑定士A氏の父君だった。骨董商売には、相当な目利きであると同時に老練な手練手管が必要で、生半かに古美術を勉強しても踏み込める世界ではない。

社長やまだ青年だったA氏の傍らで、お客さんとの人間力勝負を幾度か見た。たいていはお客さんに勝たせて喜ばせ、店も充分に儲かる結末となった。

私は、売れる物や希少な骨董品は何も持っていない。でも、しぶとく使い続けてガラクタ化している古物なら、ある。ガラクタには骨董のような怪しい光はなく、私以外のところではゴミに等しい。

卑屈に言うわけじゃないが、有用性として考えるならば、私自身がガラクタみたいなもんだ。

「主は荒れ野で彼を見だし、獣のほえる不毛の地でこれを見つけ、これを囲い、いたわり、御自分のひとみのように守られた(申命 32:10)」。神は、はなはだ無力な彼(私)を見だし、御自分のひとみのように守って下さっている。

「主は地の面にいるすべての民からあなたを選び、御自分の宝の民とされた(7:6)」。オリエント世界の強国民や、知恵や技術に長けた民ではなく、なぜイスラエルの民を選んだのか。「あなたたちを選ばれたのは～あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった(7:7)」から。

乱暴な物言いだ、神が「御自分の宝(7:6)」とされた民は、いわばガラクタだ。世の有用性はなく、骨董商売にもならない。ただ、神が御自分の宝とされるゆえに、計り知れない価値がある。

神は最貧弱な者を選ぶ。私は、そんなバカな、とは思わない。私だって価値のない、自慢しようもないガラクタを、手放さないで使っているのだから。

神が御自分の民とされた「宝(seggrah)」は、宝飾店や骨董店に飾られて商売になるような代物ではない。敷衍するならば「私的財産」のことだ。

「鷺が巢を揺り動かし、雛の上を飛びかけり、羽を広げて捕らえ、翼に乗せて運ぶように(32:11)」。 「雛」である私のために、「鷺」たる神が全力で関わり、他に代わりなき私的財産にして下さっている。私たちに、それほどの「宝」なのだ。

私たちにはそれなりに、世が必要とするものに応える能力もあろう。そうした賜物は存分に使えばいい。だが私自身自身の重さは、そんな相対的な能力や人間性によるものではない。私一人ひとりが神の私的財産、このことが揺らぐことのない価値なのだ。

「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実またそのとおり(1ヨハ 3:1)」。

「私たちが神の私的財産(申命記)」であることもそうだが、「私たちが神の子である(1ヨハ)」であるという真実にも仰天する。私たちは、神が大切にしているガラクタ、そのために神の子とされた。

これに驚かされた私たちは次に何を見つめるのか。己自身の存在の重さに驚く眼で何を見、どこへ向かい。未来はどのように開かれていくのだろうか。

「愛する者たち、わたしたちは今既に神の子だが、自分がどのようになるかはまだ示されていない。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っている(3:2)」。

神の子とされるほどに愛され、その愛にこの胸を熱くして私たちは出発する。キリストに似た者となるという到達点は示されている。だから臆することなく、神のガラクタらしく、商品価値にならないことを試みていく。



《おまけのひとこと》

骨董の価値はコレクターの数と熱意の総量で決まる。だが神は、テープで補修した万年筆を使い続けるようにガラクタばかりを御自分の宝とされる。神は案外こだわり強い頑固者なのかもしれない。